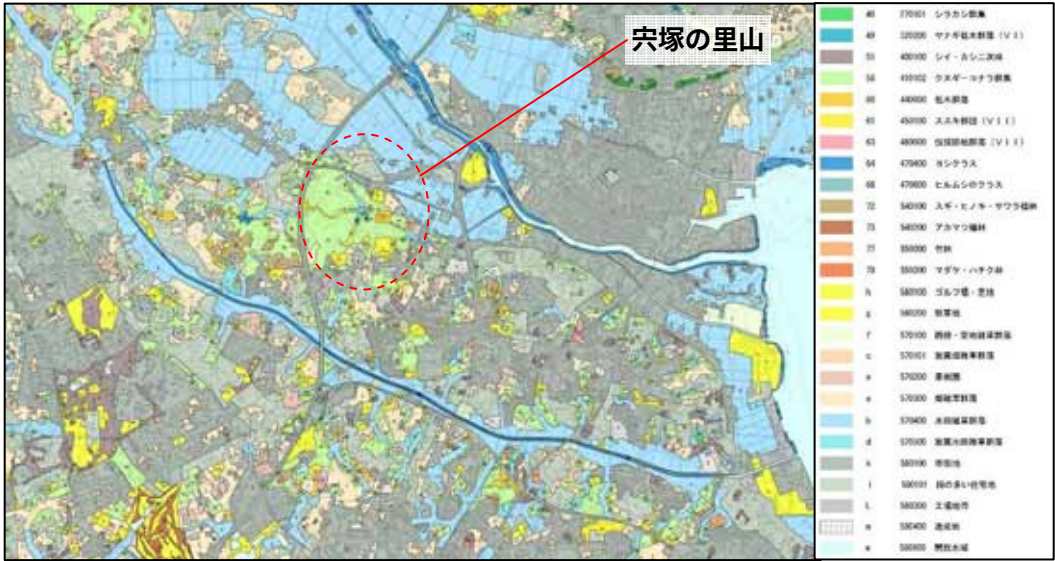


事例 No.9 茨城県土浦市^{しっつか}穴塚の里山

1. 地域の概況（基礎データ）

1) 地域の地理的・社会的条件

範囲・位置	範囲	・茨城県土浦市「穴塚の里山」（面積約 100ha）
	位置	★ <u>首都圏の都市周辺に残された里山</u> ・東京都中心部から直線距離で約 60km、JR 土浦駅まで約 60 分 ・土浦市中心部から直線距離で約 3km の都市近郊に位置している
地形・水系		 図 穴塚の位置
		★ <u>霞ヶ浦に隣接する平野</u> ・穴塚の里山は霞ヶ浦に隣接する土浦市の西端に位置する。土浦周辺には平野及び台地が広がっており、台地と平地が入り組んでいるような地形が多く存在する。 ・穴塚の里山には穴塚大池と呼ばれる面積約 3.3ha の溜め池があり、周囲からの湧水及び天水を水源としている。穴塚の里山の北部、土浦市の中央部を利根川水系の一級河川・桜川が流れ、霞ヶ浦に注いでいる。  図 土浦市周辺の地形
自然条件	植生	★ <u>点在する樹林地</u> ・穴塚周辺は宅地や市街地、または水田地帯が多くを占めているが、クヌギ - コナラ群落を中心とした樹林地が島状に点在している。 ・中でも穴塚の里山はため池（穴塚大池）を中心に樹林地がまとまって存在しており、都市化が進んでいる関東平野の中では大規模な里山である。  図 穴塚周辺の植生（出典：第 6、7 回自然環境保全基礎調査）

土地利用

★ 農耕地と住宅地が広範囲を占める

- ・穴塚の北側は桜川周辺の低地を中心に水田地帯が広がり、東・西・南部は主に市街地、宅地が広がっている。
- ・土浦市の地目別割合は、田が 18%、畑が 20%、あわせて 38%となっている。また、宅地が 23%を占めている。一方、山林は 13%と少ない。(出典：平成 20 年度統計つちうら)

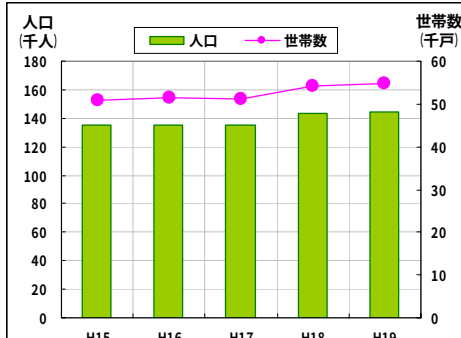
人口

★ 近年は人口が安定

- ・土浦市の人口はほぼ横ばいの状態である。平成 18 年に新治村と合併し、人口は 14 万人を超えた。
- ・現在の土浦市はベッドタウンや工業都市としての役割が強く、ほとんどが第二次、第三次産業の従事者である。

図 土浦市の人口推移

(出典：「平成 20 年度統計つちうら」を元に作成)



年度	人口 (千人)	世帯数 (千戸)
H15	135	48
H16	135	49
H17	135	48
H18	145	52
H19	148	53

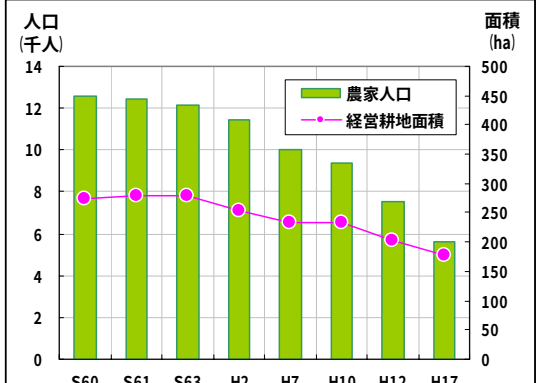
産業（主に農林業）

★ 農業の担い手が著しく減少

- ・昭和 60 年に 12,553 人だった農家が平成 17 年には 5,592 人と半分以上にまで減少した。経営耕地面積は減少率が約 35%と農家人口ほどは減少しておらず、経営耕地面積辺りの農家数は増加している。

図 土浦市の農家人口・経営耕地面積の推移

(出典：「平成 20 年度統計つちうら」を元に作成)



年度	農家人口 (千人)	経営耕地面積 (ha)
S60	12.6	280
S61	12.5	285
S63	12.0	280
H2	11.5	260
H7	10.0	240
H10	9.5	240
H12	7.5	210
H17	5.6	190

歴史・文化

★ 人々の営みの中で利用されてきた溜め池・雑木林

- ・穴塚周辺では、古くは旧石器時代後期（1 万数千年前）から各時代の遺跡が数十箇所確認されている。特に、複数確認されている古墳は穴塚古墳群と呼ばれている。
- ・穴塚周辺の遺跡の一つである上高津貝塚には縄文時代の人々の営みの形跡が残されている。また、他の遺跡においても縄文時代の生活用具や古墳時代の祭の道具などが発見されており、穴塚周辺では古くから人々の営みがあったことを示している。
- ・穴塚大池は農業用に 3 つの谷を堰き止めて造られた。上空から見ると「大」の形をしており、これが「大池」の名の由来だという説もある。

写真 穴塚大池



社会条件

	・穴塚大池周辺の森林は、燃料・肥料・建築材料等を得る場所として利用されてきた。この利用により人の手が入った森林は動植物の生息・生育場にもなっており、人々の営みと動植物が共生していた。溜め池、森林と田畑の組み合わせにより農家の生活は支えられ、里山の文化が長い間保たれてきた。 ・穴塚の里山の特長の一つとして谷津田があるが、湧水が豊富な谷津田は稲作が最初に始められた場所だと言われている。 ・関東平野にはかつて、穴塚のような里山が普通に存在していた。しかし、戦後から高度経済成長期を通してそれらの里山は急激に失われていった。現在の関東平野においては、穴塚のように 100ha もの面積を持つ里山は貴重な存在となってしまった。 (出典：穴塚の自然と歴史の会 WEB サイト)
--	---

2) 生息する主な生物種

里地里山に特徴的な生物種	○里山に特徴的な動植物をはじめ、全体で植物 681 種、鳥類 145 種(猛禽類 13 種を含む)、トンボ 51 種、蝶類 64 種と、多種の動植物が確認されている。(出典：1998；及川ひろみ；穴塚の自然と歴史の会-地域住民による里山の保全と利用；ランドスケープ研究 61(4)；日本造園学会；p302-303)
主な生物種の生態的特徴	サシバ：ハシボソガラス大のタカである。夏鳥として本州、四国、九州に渡来し、南西諸島では越冬する。春秋の渡り期には集団での渡りが各地で観察される。低山の林で繁殖し、林縁部に近い農耕地で小動物などを捕食する。 (出典：日本の野鳥 590、2000、真木広造・大西敏一、平凡社) オニバス：やや富栄養化した湖沼・溜め池などに自生する水草で、全体に鋭い棘がある。スイレンに近縁の種であり、直径 0.3～1.5m の円い葉を水面に浮かべる浮葉植物である。葉の裏面は鮮やかな紫色である。花期は 8～9 月で、直径 4cm ほどの赤紫色の花を咲かせる。 本州・四国・九州に分布しているが、各地で急激に減少している。全国で 30 地点ほどの生育地の記録があるが、現在はその 8割近く場所では既に絶滅したと考えられる。茨城県には多数生息していたが、現在は県南地域に僅かに残存しているのみである。埋め立て・水質汚染等により減少している。 (出典：茨城における絶滅のおそれのある野生生物<植物編>一普及版一、茨城県、1999 エコロジーガイド 人里の自然、芹沢俊介、1995、保育社)



穴塚で系統保存の取組が行われているオニバス

2. 地域における里地里山の保全・活用の取組

～貴重な生態系と共存の歴史に注目した里地里山づくりの取組～

1) 取組の実施主体・体制

NPO 法人「穴塚の自然と歴史の会」が中心となり、地元農家の理解・協力を得て多様な主体と連携ながら、「穴塚の里山」全体としての保全・利活用の取組を実施している。都市近郊という立地条件も活かし、複数の企業、大学、研究機関、地元小中学校、企業（富士通・INAX 等）等と連携するほか、土浦市、茨城県環境政策課、林政課、農政・農村環境課等の行政の協力も得ている。2001 年からは環境省が進めている「モニタリングサイト 1000」において、里地里山コアサイトにもなっている。

2) 取組の目的・理念

穴塚の里山は、溜め池（穴塚大池）を中心にした公園とし、それ以外は市街化するという計画が提案されている。しかし、そのような整備では豊かな里の自然のごく一部しか生き残れないのではないかと心配されている。地主・行政・市民が一体となって英知を結集し、古くから大切に育てられ、伝えられてきた穴塚の里山の豊かな自然と、先祖のくらしの様子や願いを今に伝えてくれる貴重な遺跡を文化遺産として残す方法を考え、未来の子供達に受け継ぐことを目的としている。

また、穴塚の里山は農によって育まれてきた自然であり、農なしではその存続は困難であるという認識である。これまで養われてきた農業に対する知恵を活かしながら、地元の農業を活性化するために努力し、環境に配慮した農業を進めている。農家が生業として農業を続けることができる条件を整えることを目標の一つとしている。

3) 取組の経緯

平成元年	「穴塚の自然と歴史の会」が発足
平成 4 年	「オニバスサミット」を開催
平成 5 年	「里山サミット」を開催
平成 6 年	「サシバサミット」を開催
平成 7 年	「穴塚地域自然環境報告書」を出版
平成 11 年	「聞き書き、里山の暮らし - 土浦市穴塚」を出版
平成 15 年	「穴塚の自然と歴史の会」が NPO 法人となる
平成 16 年	「ため池シンポジウム」を開催
平成 17 年	「続 聞き書き、里山の暮らし - 土浦市穴塚」を出版

4) 取組の主な内容

取組は生き物、農業、文化、里山の保全活動、調査など多岐に亘ることが特徴である。また、地域の多様な主体により取組が実施されている。生物多様性を主眼とした農作業や植生管理、穴塚の価値を明らかにするための調査、年齢・対象が広範囲にわたる環境教育など、総合的な活動を実施している。また、活動の成果の冊子として出版、シンポジウムでの全国に向けての情報発信、大学や研究機関との連携等により、里山やその保全に関する研究の発展にも貢献している。

また、子供向け案内を毎月 14,000 枚発行するなど、地元小中学生・大学生などの若い世代の参加に特に力を注いだ結果、現在では様々な世代の人が集う活動となっている。

ここでは、その中から代表的な取組として、下記の取組を紹介する。

- ①調査活動・野生動植物の保全活動
- ②里山さわやか隊（里地里山保全ボランティア）
- ③農業の継続に向けた取組み
- ④自然観察会・環境教育
- ⑤歴史・文化の継承に関する取組
- ⑥若者たちと協働した取組

① 調査活動・野生動植物の保全活動

《主な取組内容》

- ・里山の保全のためには「その場所がどんな場所、どのような環境、どのような保全が必要か」ということを考えなければならず、そのためには様々な情報が必要となる。
- ・その一つが環境を知るための調査である。穴塚の里山では穴塚の歴史と自然の会独自の調査と、環境省のモニタリングサイト 1000 の調査が実施されている。毎日のように多様な調査が継続的に行われ、データの蓄積が進んでいる。
- ・穴塚の歴史と自然の会の独自の調査として、サシバ、キノコ類、植生、昆虫、チョウ、野鳥、魚類、クモ、水環境、池の植生等の調査を行っている。
- ・環境省のモニタリングサイト 1000・里山コアサイトの調査としては、植物、野鳥、カエル、哺乳類、水質、地域の環境の変化を捉える等、多様な調査を実施している。
- ・また、保全・再生事業として外来種駆除を継続して実施し、成果を上げている。
- ・野生動植物の保全活動として、生物の多様性を目指した森づくり、サシバなどを保全するための田んぼの耕作、フクロウ・カヤネズミ等の生息を保全するための休耕地の草刈り、外来魚の除去、野生ハスの刈り取りによる溜め池の水質改善、オニバス・ジュンサイの系統保存、アライグマ捕獲による野生生物の保全、休耕地のビオトープ化等を実施している。

② 里山さわやか隊

《目的・ねらい》

- ・里山さわやか隊は里山保全活動を行うボランティアの集まりである。
- ・1990 年から活動している雑木林のフレッシュアップ、散策路の草刈り、溜め池でのハス刈り、ゴミ拾いなどの複数のグループを1997年に統合して発足した。

作業の方針

- ・学ぶことを第一義と考える。自然から学ぶ、地域の人から学ぶ、体を動かすことにより学ぶ、他の人の姿から学ぶ。
- ・作業内容は、個々人の選択の余地を残して決める。強制しない、誰でも参加できる内容。
- ・自分の体力・ライフスタイルにあわせ無理をしない。安全第一で作業する。

《主な取組内容》

- ・里山の環境や景観を維持・復元するために雑木林の管理を行う。具体的には、下草刈り、間伐、林縁整備、樹木の利用、キノコ採り、炭焼き、山菜採り等を実施する。
- ・生育可能な植物種を増やすため、観察路周辺の草刈りを実施する。これにより観察路が歩きやすくなり、植物種数も増えるため、観察会はより充実したものとなる。
- ・魚類や両生類をはじめとした水生生物を育てている小川を、子供達が親しめるように整備する。
- ・溜め池において、ヤナギバスやヒシの刈り取り、富栄養化対策等を実施することにより、オニバスをはじめとした希少植物の復元を図る。
- ・草刈りや田植え・収穫などの農業体験を実施し、休耕田を復活させることで、里山景観の復元を図る。



多様な生物の生息を目指した森づくり



野生ハスの刈り取りの様子

③ 農業の継続に向けた取組

《田んぼ塾》

- ・穴塚大池周辺の谷津田の現状を分析した上で、その保全方法を検討し、田んぼの保全から里山の保全を目指す。
- ・米を耕作している谷津田においては、地権者の協力を得ながら農作業の実体験（学習）の取組も実施する。
- ・里山の生き物を支えている谷津田において、米作りに取り組む。

- ・以下の田んぼを対象として活動を実施している。

A.稲を作っている田んぼ

B.1～2年休耕している田んぼ（すぐ稲作可能）

C.休耕放置されている田んぼ（セイタカアワダチソウや木が繁茂している。イネ作りに数年以上かかる。）

D.会が草刈している田んぼ（米以外に野菜などを栽培可能な部分がある。）

- ・イネ作りの暦を3月中に決定し、熟成に徹底している。
- ・活動を行っている田んぼは減反休耕田であるため、稲作は援助米とし、生産目的としない合法的な米作りを実施する。青刈りなど、援助米以外の米作りの可能性も追求し、行政等にも働きかけていく。
- ・現段階での援助米以外の米作りとして、古代米の見本市園、しめ縄用、ドライフラワー用の青刈り、稲のお絵かき（シシカサシバの里）を実施している。
- ・田んぼ塾の田んぼ以外にも休耕田の草刈等を実施しているほか、谷津田の生き物の保全、ハンノキ林を含めた溜め池周辺の湿生植物の育成、カエルの産卵育成の場作りも実施している。
- ・田んぼ塾の参加者には1口あたり収穫したお米（品種名：ミルキープリンセス）2kg、古代米（赤米、黒米）200gを進呈している。

《穴塚米オーナー制度》

- ・谷津田は面積が狭く不便な場所にあるため、機械化が進んだ現代の稲作と比較すると、谷津田における稲作は労力がかかる。そのため、現在は多くの谷津田で稲作が放棄されてしまっている。
- ・オーナー制度は穴塚大池周辺の谷津田において稲作を維持・発展させるために、谷津田で稲作を行う農家の支援を目的とした制度であり、地元農家が生業として農業を続けられるように、農家が生産した米を都会の人々が購入できる仕組みである。「サシバの里 穴塚米」と名づけられた米は、生物多様性を育んだ米として特に都会の人にアピールできる、付加価値がついたブランド米となっている。田んぼ塾はオーナー、市民を対象としており、基本的に誰でも参加できる。
- ・穴塚米は生物多様性の保全に配慮し、農薬等については以下の条件で栽培されている。

農薬等の使用に関する情報

- ・種子（種粃）消毒：使用回数ゼロ（種粃を60℃のお湯で5～6分浸ける）
- ・田植時の箱苗施薬：殺虫剤を使用しない。
- ・除草剤：使用回数1回（ヒエ・コナギなどの雑草防除）
- ・田んぼでの農薬：病気（いもち病）に対して、必要に応じて使用する。
- ・肥料：代掻き前に使用し、追肥はしない。「特別栽培米適合肥料」を使用予定。

栽培方法は生産者の考えを尊重し、穴塚の自然と歴史の会では一切の制約をかけていないが、里山保全の趣旨を理解してもらい、生物に優しい農業を配慮してもらっている。

《里山ふれあい農園》

- ・里山さわやか隊では、地権者の許可を得ながら休耕田の草刈りを行ってきた。1999年にはアズマネザサや葦の刈り払いを行った休耕田を、地権者の許可を得て野菜栽培等（減反休耕田であるため、稲作はできない）に利用し始めた。
- ・最初の2～3年ほどは畑にはならないだろうという意見が多かったが、約12aある休耕田のうち約3aを「とにかくやってみよう」ということになり、6人で耕作を始めた。この農地に「里山ふれあい農園」と名づけた。その後、隣接した約12aの土地の使用許可を得ることができ、草刈りを行った。現在は併せて24aが耕作可能な状態となっている。
- ・里山ふれあい農園の管理運用方法を参加者の中で相談しながら進めている。

- ・下記の条件で農園グループの会員を募集している。

- 穴塚の自然と歴史の会の会員であること
- 里山環境保全の趣旨に賛同して協力してくださる方
- 契約期間を1年ごととし、年間を通じて手入れのできる方

＊管理する面積は1坪から数十坪まで自分のライフスタイルに合わせて選択が可能。

④自然観察会・環境教育

＜自然観察会＞

- ・毎週土曜日に開催する「土曜観察会（通称：シェラカップの会）」と毎月第1日曜日に開催する「月例テーマ観察会」を開催している。
- ・月例テーマ観察会では、植物、昆虫、鳥、遺跡など、季節にあったテーマを設定し、大学や博物館等から専門の講師を呼んでいる。

＜里山こども探偵団＞

- ・里山こども探偵団は、遊びながら穴塚大池の自然に触れる子ども中心の観察会である。
- ・小川や田んぼ、草むら、林の中など、穴塚の自然の中で様々な生物を見つけたり、遊んだりしている。
- ・その日の生物の様子や集まったメンバー等によって様々な内容となる。
- ・幼児でも参加することができ、親子ともに楽しむことができる。

＜環境教育部会＞

- ・環境教育部会では学校・諸団体と協力して、観察会や自然体験といった自然教育の手伝いを実施している。
- ・前進は2000年6月に発足した「子ども部会」である。この部会は毎月の観察会や小学校が企画する自然教室において、子どもたちが自然という対象に興味を持ち、観察をするきっかけとなるように、観察会等の実施体制、資料の作成、方法の学習会など、観察会に関する様々な指導・助言を行ってきた。2002年11月から「環境教育部会」と名称を変更し、活発な活動を続けている。
- ・具体的には指導マニュアル、ガイドブック、マップ、ワークシート、ガイドライン、着眼点、季節ごとのリスト、場所、環境についての基本的な事柄などの資料を作成する。また、観察会の企画・指導者向けの学習会も実施している。

⑤ 歴史・文化の継承に関する取組

＜主な取組内容＞

- ・里山は、人間と自然の共生の産物であり、それぞれの地域に特有の歴史や文化がある。自然と共存できる未来の人間のあり方を考えていく上で、穴塚の人々の昔からのくらしや文化について知識を深め次の世代に継承することが必要である。穴塚の「自然」については、系統的な調査を実施したり、報告書を作成したりと充実した活動を行ってきたが、穴塚の「歴史」については「自然」と比較して比重が軽くなりがちであったため、「歴史」にもっと取り組んでいこうとの声があがり「歴史部会」が結成された。
- ・歴史部会は以下の方針で活動を実施している

1. 穴塚の昔のこと、昔のくらしなどについて、たくさん地元のかたがたのおはなしをうかがおう。また、資料もあたっていこう。
2. 穴塚のくらし、里山の歴史がうきぼりになるようなポイントをあげてみて、伺ったお話を項目後とにまとめていこう。
3. 専門家ではないので、まとめられる部分から、小冊子をつくり、結果的に何冊かにまとめていこう。

- ・地域のかつての姿、農業、暮らし、文化、年中行事、子どもの遊び、生き物のことなど、様々な内容について地元の方を尋ね、「聞き書き」として記録してきた。
- ・地元の方から伺った内容を文章にまとめる、資料の収集、挿絵の作成、写真撮影、校正、注釈の記述、前書きの記述、その他、多く仕事を大勢で分担し、編集者の奮闘の末、成果をまとめた冊子を作成することができた。
- ・これまでの穴塚における聞き取り調査の結果に資料を加えて「聞き書き、里山の暮らし - 土浦市穴塚」を出版。さらに、続編も出版されることとなった。

《野良クラブ》

- ・野良クラブはふれあい農園の活動の一部として 2001 年に活動を開始し、伝統的な作物の栽培とそれらを用いた加工（食）品づくりに取り組んでいる。
- ・この活動を通して、地元の方々と自然そのものから、里山の伝統的な暮らし（知恵や技術を含む農の文化、生活文化）を学び、保全・継承することを目指している。
- ・現在、大豆・蕎麦の無農薬栽培と、その収穫物を用いた味噌・納豆づくりなどを実施している。使用した大豆の一部は、穴塚の地元農家から種を譲り受けて栽培した。
- ・農産物は無農薬（無化学肥料）での収穫を目指し、その過程で、里山に伝えられてきた知恵や技術、自然の仕組みについて体験的に学んでいる。
- ・栽培・加工等の方法・技術等はできる限り地元の方々に教わりながら行い、体験を共有することにより、穴塚の農の文化・生活文化の保全と継承に努めている。
- ・今後は麦や古代織に用いるカラムシ、アイ、コウゾ、綿などの栽培にも取り組みたいと考えている。

主に以下のような伝統的技術の保全・継承を実施している。

- ・青屋箸・さなぶり等伝統行事、ぬっぺ等々伝統料理の復活、昔の遊びの復活
- ・炭焼き、絹糸取り、しめ縄作り - しめ縄用稲栽培
- ・田んぼに関する一連の耕作技術、松ぼっくりの堀あげ、縄織い、納豆、味噌作り

⑥ 若者たちと協働した取組

《主な取組内容》

- ・穴塚の自然と歴史の会では「若者たちとの協働」を重視している。
- ・若者たちと協働することにより、新たな視点を得ることに繋がったり、活動の幅が広がるだけでなく里山保全の運動の輪が時間的にも空間的にも広がり、未来へつなげていくための大きな力となっている。
- ・里山は環境科学的な視点や、保全生態学的な視点、また、独特の文化や保全の社会的手法など学問的に多くの要素を含んでいる。これらの学問的要素に加え、多岐にわたる実践活動を取り入れた実習、講義、サークル活動などを大学と協働実施している。
- ・保全活動や現地調査などの実体験を通じて、里山についての理解を深め、共に里山の未来を考え行動する人材が育つことを目指している。

3. 取組による成果

1) 里地里山の土地利用・管理の効用

★ 都市周辺の生物多様性の保全

- ・様々な管理作業等を行うことで、約 100ha という関東平野では最大級の里山が維持されている。常に開発の危機にさらされている都市周辺の私有地において、貴重な緑・生物多様性が保全されるとともに、調査活動によって里山に生息する生物やその保全に関する知見が蓄積されている。これらの知見は今後の里山の生物多様性の保全には不可欠な情報であると考えられる。

★ 穴塚の里山の継承と、その意味・意義の明確化

- ・地元の暮らしや文化伝統を掘り起こし、「聞き書き」としてまとめることで、各地で失われつつある里山の伝統的技術・文化の継承に貢献している。また、生物相調査（植物、昆虫、両生類、爬虫類、野鳥、ワシタカ、キノコ、クモ、植生等々）、水質等の自然環境調査の結果も併せて、地域の特性が明確化し、継承の意味、意義が広く周知されつつある。
- ・都市周辺という地の利もあり、若い世代が活動へ参加するようになった。環境教育の観点から、また、伝統的技術の継承の観点からも若い世代の参加は重要であり、大きな成果だと言える。

表 穴塚の里山における里地里山の土地利用・管理の主な効用

項目	過去からの土地利用・管理で培われてきた効用	近年の取組を通じて再生・獲得された効用
1. 生物多様性保全（生物種・生息環境・土地利用）	・ため池を中心とした里山は、水辺から農地、森林に至るまで多様な環境を生み出し、多様な生物の生息場となっていた。	・調査や保全活動を通じて、里山に特有の生態系や、その保全に関する知見や情報が蓄積されている。 ・里山がかつてのように管理されるようになり、都市周辺の貴重な生物の生息地が維持されている。
2. 資源の持続的利用・生態系サービス（水・食料・生産物・気象・土壌・エネルギー・廃棄物・CO ₂ ）	・森林は燃料や肥料、建築材料を得る場所として利用され、ため池や田畑と併せて農家の生活を支えていた。	・耕作不利益地であることや、減反により放棄されていた田んぼが再び管理され、農地として利用されるようになった。 ・生物多様性を育んだ米という付加価値も生まれている。
3. 人間の福利への貢献（人口増減・平均寿命・健康度・幸福度・郷土意識・相互扶助・快適性・自然認識）	—	・若い世代の参加者が増え、伝統的文化や技術への理解が高まり、継承が図られている。 ・生物多様性や歴史・文化の観点からの継続的な調査により里山を継承する意味・意義が明確化された。
4. 歴史・文化の継承	—	・穴塚の里山の歴史や文化は冊子としてもまとめられ、里山の伝統が記録として残った。

2) 外部評価

★ 里山特有の自然環境・文化が高く評価されている。

- ・日本昆虫学会により「穴塚大池地域」が昆虫類の多様性保護のための重要地域とされており、昆虫の多様性の面から穴塚の里山の自然が評価されている。
- ・文化財保護法に基づく農林水産業地域に関連する文化的景観重要地域（文化庁）となっている。また、歴史部会の活動が WWF ジャパンの機関紙で紹介されるなど、生物多様性のみならず、文化の面からも穴塚の里山が評価されている。

★ 里山の生物多様性保全等の取組が評価され、地域の主体が表彰を受けている。

平成 16 年

- ・行政、研究機関、地元農家、学校等と連携し穴塚大池を中心とした里地の保全活動、環境教育の推進等に尽力した功績が認められ、「みどりの日」自然環境功労者環境大臣表彰（環境省）受賞。
- ・穴塚大池の水環境および生態系保全のための活動は水環境の保全と創造に寄与する優れた活動として認められ、水環境文化賞（社）日本水環境学会）受賞
- ・ため池集水域の多様な環境を持つ里地里山の維持管理、専門家と連携した生態系調査、歴史文化調査等が評価され、「日本の里地里山 30 保全活動コンテスト」（読売新聞社）において 30 団体の一つとして選定された。

平成 17 年

- ・里山の自然と文化の保全に対する貢献が評価され、第 5 回日本自然保護協会 沼田真賞受賞。
- ・ふるさとづくり賞内閣総理大臣賞（財）明日の日本を創る協会）を受賞。
- ・活動内容が幅広く、社会的貢献度が高い取組として、田園自然再生コンクール（農林水産省、農村環境整備センター）にて朝日新聞社賞を受賞。

4. 今後の課題

★ 長期的な活動の継続に向けた新たな担い手の確保

- ・穴塚における活動は、地元の農家の協力を得つつ、外部の多様な人材の連携・協働により進められており、子どもたちや大学生など次世代の参加にも力を入れている。今後の長期的な活動の継続・拡大に向けて、若者への働きかけを続け、現在活動に参加しているメンバー以外の新たな担い手も確保したい。

★ 生物多様性に関するデータの蓄積と他地域への貢献

- ・穴塚では、専門家の参加により生物相調査（植物、昆虫、両生類、爬虫類、野鳥、ワシタカ、キノコ、クモ、植生等々）や水質等の環境調査が実施されており、生物多様性の観点から充実した調査研究体制が構築され、成果も得られている。
- ・全国各地の里地里山では、生物多様性の観点からの管理手法と効果が明らかにされているケースが少ないと考えられることから、今後も長期にわたって調査を継続することにより、穴塚のみならず他の地域の里山における生物多様性保全にも貢献できるように知見を蓄積していくことが望まれる。

★ 里地里山の環境保全と適正な利用の両立

- ・穴塚は都市周辺に残る貴重な緑であるため、一般の人も多く訪れるが、その多くは私有地であるため、看板を立てて散策路以外の無断立入を防止するといったことを実施している。
- ・一方、里地里山の価値を広く理解してもらうためには、見学や体験の機会を提供することも重要と考えられることから、今後は、里地里山の環境保全と適正な利用の両立を図るための取組が求められる。

※本事例において掲載した写真はいずれも穴塚の自然と歴史の会提供